

～昨日の風 明日の風～
**経営コンサルタント
 独白録**

[第105回] 二元論との戦い！



戸敷 進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、(株)経営改善支援センター(福岡市、URL <http://sien.co.jp/>)代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家で、全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

「仕事と生活のどちらが大切ですか？」
 ある日若手社員研修の終わりにこんな質問を受けました。戦後【西欧的教育】に毒された国なので、すぐに全てのことを対立として考えます。善と悪、光と闇、天使と悪魔、天国と地獄、精神と肉体…。これは、キリスト教やイスラム教に代表される一神教社会で生まれた考え方です。「絶対神」の下では最初から厳格な枠組みが示されているので実際の考えや行動も対立として考えなければなりません。

愛と博愛を説く宗教であるキリスト教が、歴史上どれほどの異教徒を迫害してきたかという現実はこちら二元論的思考から発生しています。一部のイスラム教徒が過激派となりテロリストと呼ばれている現実もまたこうしたものに由来している部分があります。

対立の果て

そうしたことを説明した後、「対立として考えると、当然争いになる。どちらが優勢であるか、どちらを優先的にすべきかと言う短絡的な話になります。本来、生活と仕事は重なり合っていて、一心同体として考えなければならぬのではないかと。きちんとした生活を送ってなければきちんとした仕事はできないし、きちんとした仕事をするによって生活が充実するのではないかと。」

また、「こうしたキリスト教的な西欧的発想から考えていくと、企業を組織内においても経営者と労働者、管理職と一般社員、正規社員と非正規社員という対立構造で物事を考えようとする。」「本来ならば、良い生活を送るために良い仕事をして良い仲間とともに生きていくと言うことが必要はずなのに、最近では難しくなっていますね」。このように、なぜ生活と仕事を対立として考えようとするのかということをお話しました。

平等の勘違い

若い人たちが多かったので、丁寧に話したつもりでしたが、なかなかうまく伝わったと言う印象はありませんでした。幼い時から、偏った合理的、効率的、個人主義、自由主義の洗礼を受け続けて

きた世代にはわかりにくい話だったかもしれません。「人間は生まれながらにして平等だ！」という誤った考え方を教えられてきた世代です。社会には、背の高い人間もいれば低い人間もいる。頭の良い人間や、運動能力の優れた人間もいればそうではない人間もいる。美人やイケメンもいれば個性的な顔立ちの人間もいる…。本来正しい表現は「人間は生まれながらにして平等であるべきだ。しかしながら現実はそのようではない。そのために必要なものは他者に対する理解とリスペクトであり、何よりも己の努力が必要である！」と教える必要ならなかったはずなのですが、誤った理想主義を押し付けたために、現実と折り合えない世代が増えているようです。「ゆとり教育」などという本質を間違えた教育思想や誤ったリベラルが社会から「リアル」を失わせているようです。

重なり合いの枠組み

東洋的な【陰陽】とは“重なり合い”という意味です。仕事と生活は重なり合っています。経営者と労働者も重なり合っています。重なり合っていることを理解すれば、対立ではなく対話が始まり、対話から改善が進んでいきます。人間という生き物は昆虫や単純な本能優勢の生物ではなく、社会性を必要とする生き物です。人間は他者との関わり合いなく生きていくことができません。ましてや集団として生きる上で、こうした原理原則に基づく枠組みを定めなければ対立が発生しそれが混乱につながり自壊していきます。

二元論とは、世界や事象を、二つの相互に独立した根本原理によって説明する立場のことです。しかしその二元論は絶えず「対立の芽」を内包しています。メディアのコメンテーターや大学教授などは、自分や己の考えを目立たせたいために絶えずこの二元論に話を持っていこうとします。組織を運営する人たちはそうした安易な発想に巻き込まれてはなりません。

組織活性化活動の支援のなかで、この「二元論」との苦しい戦いが続いています。皆様方の組織ではいかがですか？